昭和二十四年七月二十三日　第一種郵便物認可
昭和五十六年四月　十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

（通第三八二号）

目次

私の入信の径路……福島政雄……(2)
臼杵祖山師を偲ぶ……西元宗助……(9)
一道会の記……榊原徳草……(12)
御一代記聞書抄（続・一八）……井上善右エ門……(17)
念仏詩抄……木村無相……(20)
近角真観様を悼む……花田正夫……(23)

第三十三巻　第四号

序歌

華厳経

一、御仏にあいまつらんは　限りなき時のまにただ一度ぞ
諸々のさわりを離れ　みのりをうけよ

われらは悩みの海に沈みよこしまの心おののく
御仏はなさけもて　浄き世界を示したまう

御光のおのおのに　限りなき仏ます
限りなきてだてもて　われらを救いたまう

仏の身は浄くして寂か　御光はなべて世を照せども
まことは寂かにして　すがたなし

仏の境界は測り難し　限りなき御教も
一つ御声にてのべ給う

此の御声あまねく至り　人々は器に随いて解り
おのおの御教は一つとおもえり

二、なべて世の楽のうち　浄き寂けさにしくぞなき
穢れなきみ法は仏の室　さながらに見るは仏の眼

すべて我等の国々は　仏の一毛の中に入りて足らず
まこと仏のみなさけは　大空のこと広やかなり

吾等の憍ぶる心は堆い山御仏は智慧と方便で砕き給う
限りなき時を重ね行を修め愚かなる我等の闇を除く
仏の智慧こそ浄らなれ

三、量りなき時の昔　生死のなやみ永く尽くし
吾等に清き道を教ゆ　御仏は智慧の燈なり

生よ死よ病よ、　憂き悲しみなやみ多くも
人もしひと度仏を見れば心は浄き世界に入らん

数しれぬ国々には　深き功徳みつ
穢れなき仏の子等集い　常に御法の声を聞く
仏は獅子の座にあれど　あらゆる塵の中にもいます
数々の行を示し　不可思議の方便を説きて
仏の子を浄き世界に入らしむ

おお浄き証の世界功徳の海よ縁ある人々これを聞けば
道を求むる心をおこし　遂に勝れる身とならん

私の入信の径路

福島政雄

宗教的自覚

これには大体三つの段階がある。明治時代の思想家、清沢満之師がいわれるには、人間の精神は浅薄なものから次第に深刻なものと変ってゆく。その段階が三つになる。第一は客観を追う、外物のみを追うのである。第二は主観を追う、自己の欲するままに行動するのであるが、この二つのものは余りに囚われたもので、極めて不徹底な状態である。第三は客観、主観を超越して、縦横自在にこの人生に活動してゆく徹底した段階である。この三つを今ここに、努力観・天命観・無我観と宗教的自覚を分けてお話しようとおもう。

第一の努力観は、我々の努力を大いに価値あるものとするのである。これは人間が志を立てるということから始まる。人間は最初無自覚状態である。たとえば、徒らに客観の外物を追うが如くである。何か新しいことが流行すればそれを無自覚に追うのである。なにも新智識を得るのを攻撃するのではない、それは別問題である。

この見地から現今（昭和四年）の日本の状態は無自覚である。自己の立脚地を失っている、吾人は大いに反省せねばならぬ所である。これは今云う三つの段階に入らない、それ以前の状態である。

宗教的自覚の第一段に入るには最も敬虔にして大いなる努力を要求する。古来いわゆる立志がそれである。たとえば中江藤樹先生の如き、十一歳の時に学に志された。これが宗教的自覚の第一段階であって、努力修行を主とする自力の立場となる。一見痛ましく見え、また無自覚の者が努力修行に志すから非常に際立って見えるものである。

これをを人間の発達の上から見ると、大体青年期に起る。青年期は努力修行を主として理想に憧がれるものということは何人も首肯出来ることである。

この努力修行することが、時の流れとともにいかになりゆくか。この実例として、人のことはさし障りがあるから

自分のことをうちあけて考えて見ると、私は中学四年の頃から努力、特に道徳的努力について考え始めた。その少し前に「立志の礎」という本を読んだが、その中に米国の詩人ロングフエロウが〝勇み進む〟という詩を熱心に書いてある。それは「夕陽がまさにアルプス山脈の彼方に没しようとするとき、空にはコバルト色の雲が無心に飛び通い、地上は唯茫々とした大雪原、吹く風もパッタリと死に、人住まぬ郷国をしのばすような沈黙が、天にも地にもみなぎってきた。突然、積雪を蹴って来る足音が沈黙の底にものすごく滲み入った。音は次第に近くなる。見れば一人の青年が旗を振りかざしつつ進んでゆく。彼は諸人の危険を叫ぶ声に耳を借さず、唯まつしぐらに進んで行く。夜を通して何処々々までも希望の光に憧がれ導かれつつ」という趣きを歌っている。これを読んで何事も努力修行の大切なことを思い心を躍らしたものである。

バイブルと法華経

此頃からバイブルを読み出した。キリスト教は青年が感ずる宗教である。高等学校時代には新約聖書を非常な感激をもって読んだ。特に山上の垂訓は深刻に私の魂を動かした。然しこの時は皆自分の努力修養に資するという外にはなかった。

そのうちに次第に私の見て行く世界が変化し、高等学校から大学にかけては熱心に日蓮聖人のものを読み始めた。当時非常に日蓮主義が唱導され、また国家主義も非常に盛んであった。私は国家主義と結合されている日蓮聖人のものを読むに従って自分でも非常に感激して、随分自分を向上せしめたように思うていた。御遺文の中の種々御振舞鈔、如説修行鈔等を著しく感じ、このように道のために身命を捧げねばならぬという気になっていた。

以上は私の努力修行のよい方面であるが、悲しい哉、一方これを裏切るものがすでに内心にはやくから出来ていたのである。

高等学校時代に彼の厨川白村氏の教授をうけた。当時大学を出て間もない氏は、青春の気に燃え、熱弁を振って、現代英文七大家集を説き、恋愛至上主義を唱え、科外にブラウニングやロセッチ等の濃厚な恋愛詩を講義せられた。ブラウニングの詩の最後の句は〝恋愛は至上〟であった。

こういう講義で「恋」が大変美しく見え、私はそれに内応するような欲求が内心にあるから、それにかぶれることもあった。

その頃から私は小説等を読み始めた。元来私の家庭は儒教的で父母が非常に厳格であったから小説は禁ぜられていた。それが高等学校になると大いに自由になり小説を盛ん

に読み始めた。主なものはトルストイ、ツルゲネーフ、二葉亭等のものであった。すると私は努力修行の一面に、恋愛に興味を引き、またその思いが生じてここに努力の破れが出来、一方に進歩すると共に、他方には堕落したことが今では反省せられるが、自分では努力の効果があらわれて日々進んでいると思っていた。

二十四才で東大を出て、大学院に席をおいて、女学校で教鞭をとっていた。当時考えが単純で、高い理想を持って努力して段々それに到達するように考えていた。然し実際社会に立って行くにつれて私の心は次第に変化して行った。大学の終りに近い日、法華経を三度くりかえして読んで、何か大きな信念を獲たという気になり二十四才の卒業式の日には、自分は日蓮聖人の志をつぎ、日本国中に伝えねばならぬという誇りをもって卒業したのである。

最初はこれでよかったが、数ヶ月の後、自分の心に一つの魔がさし始めた。自分は他人とちがい温情をもって教育している。ペスタロッチの母の教育等にならって熱心にやっていると考えて愉快であったが、次第にその心が薄らいで、自分はこの様に熱心にやっているが一向に反応がないと考えはじめたのがそれである。

当時二十五歳で、青春の意気が燃えていた。その共鳴がないと思ったのは、教化ではなく異性を求める欲求であったと思う。それが美しい形で現れてきたのである。この魔が今までの努力や修行を無駄とし、青年期の努力を裏切るというようになった。

最初は自分が自分を裏切ったとは気づかず、人が裏切ったのであると思い、他人に憤慨し世を恨んだのである。それがどうして知れたかと云うと、二十六歳の二月頃、私の叔母が三人の子女を教育するために東京に出ていた。が三人の子女について相談にのってくれる人がないという苦しみをもっていた。その叔母が私に向い、人間は誰れも相談したのむことは出来ない。今後は人を相手にすまいと思う、私の母は真宗の信者であったから、その道を歩んで行きたい。誰か真宗の教を説く人はなかろうか、そこへ連れて行ってくれと頼まれた。

そこで私の友人が、本郷森川町に近角常観という方が講話していられる。君も一度聞きに行かないかというのを思い出し、その友人に頼んで叔母を案内してもらった。私がそのまま帰ろうと思うと、君も一緒に聞こうと云われて、一度くらい参考のためにと思い求道学舎に行った。その時の題は〝唯仏是真〟であった。

これを聞いていると何か胸に深く打たれるものがあった。人間の心は相対的で、こちらが五分思えば相手も五分だけおもう。こちらが悪く思うと向うも悪くおもう、どこまでも五分五分である。わが心は何処までも冷たい。自分には

温みがあると思うのは大きな間違いであるということを御自身の体験の上から切々と話されたので、私は自分が温いこころで教育していたことを疑い始めた。誰よりも自分が冷い心の持主である。四時間にわたるお話で、私の過去の考えは根底から覆がえされてしまい、殆んと泣かんばかりに胸を打たれた。これが絶対他力の教に耳を傾ける最初であった。

こうなると、修養を積んで立派になろうとしてきたことが無意義なようになり、自分の立場を失ってしまった。そこで非常に苦しんだ。その時には、世間虚仮ということだけが分った積りで、唯仏是真が分らなかったのである。そこで非常に苦しんだ。こんな気持で学校に出ていると、今までと違って、生徒は非常になつかしそうにするが、今度は自分を責めて苦しむようになった。すると不眠症に陥ってしまった。眠らずに学校に出ると頭が変になり、授業中にヘンテコなことをいうようになる、人は気違いのように見る、自分ではこの人生が灰色に見え、自分独りがトボトボと淋しい曠野を旅する様になった。

その年の六月に徴兵検査のために郷里熊本に帰り、其間苦しみながらも宗教書を読んでいた。検査は不合格であった。その時、両親から結婚はどうするかと云われた。然し老人なんかに青年の心が分るものかと反感を抱き、郷里を離れた。

汽車は東海道を走る、窓外に美しい景色が展開する、富士にはまだ残雪がありいかにも崇高であったろうが、私の心は物悲しさに沈んでいた。自分の親まであてにならなくなった。それなら人間をはなれて自然の美しさが頼りになるであろうか。

その時、近角先生の『人生と信仰』という本を読んでいた。その終りに「天地宇宙無始以来変遷常なき俗世界である、どうしても天地宇宙が宗教的意義を有しているとか、宗教的産物と見ることが出来ようか。これが仏教と他の宗教との根本的相違である」とかいてある。

親も自然の景色も、わが心のたのみとすることは出来ない。何を頼むべきか、こういう淋しくも痛々しい心で東京に帰った。こうして努力修行が全く無力のものとなり、親や生徒から離れ、すべての世間から見捨てられ、自分唯一人孤独に泣く身となった。

親鸞聖人は、努力修養を万行諸善の仮門と云われたが、すべてが仮りの門であった。仮門とは、向うに門があると思って進んで行くと掻き消すようになくなる。それと同じく努力や修養で進んで門へ入ろうとするとパッタリと閉じてしまった。それがどうして分ったか。日蓮主義の信仰も消失し悶々の情を抱き、二十六歳の七月求道学舎の夏期講

習会に出た。その時信巻の阿闍世王の入信の話をきき、胸中の苦悶が自然に解け、次第に私の心は変化した。

こうなると極度に疲れた心、すべてを裏切られ、見捨てられた淋しい私が、偉大な仏の慈悲にいたかれたように感じ、空の星も、地上の万物もすべてが歓喜し、祝福しているようであった。

こうして宿に帰えると自然に念仏を唱えずには居られなかった。これは私には驚くべき出来事であった。それが真宗に深い関係のある家庭であれば、決して不思議ではないが、私の家は禅宗で、儒教的に厳格で、学んだ熊本の済々校は頑固な保守的な武士道を誇っていた。聖書を読むことも、お題目を称えることも出来なかった。まして念仏の如きはむしろ軽侮していた。それが自然と念仏せねばならなかったのは非常な変化であった。

私が今まで通って来た過程を省みると、二河白道の譬のようであった。私は今まで灰色の世界を唯一人たどって来た。すると忽然として二つの河があり、それは私が世を恨み人を憤る瞋恚の火災で火の河である。また異性を恋いしたう貪欲の波浪は水の河である。

それが七月の講習で初めて西岸上の声、仏陀の偉大な慈悲の御声が心の底に深くひびき、かって経験しなかった法悦状態を味うまでになった。同時に無限絶対の世界が知らされた。これを境界として天命を知るというような事が開けてきた。仏の絶対の真実心が私の心と融け合ったことが、儒教的には天命を知り得たと云えよう。

その後の生活が天命観と無我観の生活に入るのである。親鸞聖人は、努力観を万行諸善の仮門、天命観を善本徳本の真門、無我観を選択の願海と云われ、大経の十九願、自力作善、二十願、半自力半他力、十八願、絶対他力。

この三段階を、仮門、真門、願海とせられたが、ここに深い味いがある。最初門があると思うて進むと、閉じてしまった。然し真の門はその他にある、この門を入ればそこに広大無辺の海がある。海とある点が深い意味がある。真の仏教に入るものは、すべてのものが仏教の背景として見えるようになるから、海の如き広大なる世界にとり入れられるのである。

概念的には天命観、無我観となるが、人生の行路においては、この二つの交渉点に立って進むのである。たとえば二十六歳の時の法悦状態は、しばらくすると消失する。すると自分はあの時にはあんなに法悦にひたっていたのに失せた。あの時信仰を得たのであろうか、得なかったのであろうかと自分を疑うようになり、再びその法悦をとりかえしたいと云うようになる。

努力の極まる所に無限絶対の仏の慈悲に触れ、法悦がお

こった。その法悦を忘れてこれにひっかかる。法悦があるから信仰であり、法悦がないから無信仰であると、そこにひっかかる。また念仏することによって法悦状態を得ようとする。人間が精神的にひっかかるのは魂のヌケガラになることになる。

宗教的自覚の段階を三つとすると、それぞれにヌケガラがある。第二、第三の交渉のうちに無限のヌケガラがある。大経の下巻に「道を昇ること窮極なし」とあるが、第二、第三の交渉のうちに味われる。法悦をとりかえさねばならぬというようなことを考えて、天命を知ったと云ってもそれに自分を全然まかせ切れない状態である。

これは理論上からであるが、自分の身の上を考えてみると、丁度二十六歳の秋の頃はその状態であった。自分は真に信仰に入っているのであろうか。法悦状態は次第に去らんとしている。信仰には罪悪感がなければならぬが、そのようなところが見出せないので自分の信仰を疑うようになった。その時急性盲腸炎になり、大学病院で手術をうけ病床にあった。

このように肉体上の大問題にあい、その年の暮にはまた万事解決というような気が起った。このように苦しんでいるかと思うとまた爽然として晴れる、こんなことを絶えずくり返してきた。それは信仰を功利主義的に考えていたから、少しく苦しくなれば直に信仰を疑い、罪悪感がどこにあるだろうかという極めて幼稚なものであった。

その頃、両親に対する態度も変化した。それまでは反感を抱いていてもそれを口にすることはなかった。それを遠慮なく云うようになった。それだけ心がらくになった。結婚問題でも大いに論じた。それが両親の悩みの種になって私のいう言葉の一句々々は毒の矢として父母の胸を突き刺したかも知れぬ。かくて母は翌年私の結婚について東京に出て来たが、私はそれを喜ぶでもなく、平気でいた。

大体私の性質として筆をとれば相当に書くが、口では余り云えない。母が郷里に居る時には手紙で所論を述べたが面と向っては余り云わない。そこで友人の宅に行って自分の胸を晴らし、夜おそく帰るようなこともあった。

その翌年三月頃であった。或夜更けに帰って見ると母は安らかに寝ていた。その時私は仏前で大無量寿経の五悪段を読み、その第五悪に「父母教誨すれば目を瞋らし怒りこたえる。言令和せず、違戻反逆なり、譬えば怨家の如し、子なきにしかず」等を読み、自分の親に対する態度を反省し「心常に悪を念じ、口常に悪を云い、身常に悪を行じ、かって一善なし、……善をなして善を得、悪をなして悪を得るを信ぜず」これを読み、もはや堪えられないで、そのまま泣き崩れたのであった。

それからやっと父母に従順になり、また罪悪感も得られ、それが徹すると無我観もきざしてきた。しかしまたしても我執が起るが、仏の絶大の光に照らされてひきもどされてくる。真の無我は仏の広大な力によらねばならぬ。このように天命観、無我観の間をたどりながら、最後に仏の絶対の光に照らされるというのが、その後何年かの私の生活である。この三段階は文字では区別するが、常にそれで終るのではない、交互に次から次へとくり返されるのである。

（昭和四年八月十四日）

母の詠草選

福島政雄

春

尋花

かをりくる風のたよりに山桜花のありかもしられつるかな

花

小車をしばしとどめて見つるかな道のほとりの山桜はな

山新樹

はなちりし嵐の山にきて見れば更に若葉のなつかしきかな

窓前新樹

きのふまではなをながめし我窓もしけるわか葉にうつもれにけり

野遊

ひばりなくこえにうかれて小山田のあぜのすみれをけふもつみつつ

深山花

朝日かけのとかににほふ深山路の花のさかりぞ世に似ざりける

社頭花

打ならすすずの音さへしけきかな此神垣の花咲しより

山吹

立よれば袖にも色のにほふ迄さかりになりぬ山吹の花

水辺春雨

おぼろ夜の月もうつれる池水にふるとも見えぬ雨の淋しさ

雲雀

そらになくひばりの声にさそはれてすみれ咲く野をわくるけふかな

故郷新樹

故郷のむかしの影はふりぬとも青葉の色の新しきかな

臼杵祖山師を偲ぶ

――凡骨日誌に代えて――

西元宗助

わたしのお目にかかった希有の善知識で、一部の人々には深く尊崇されながら、世間にはあまり知られず、生涯独身にて、この世を去られた方に臼杵祖山師（明治五年一月五日生。昭和二三年五月六日没、御年七十七才）がある。

老師は、大分県宇佐郡安心院町の本派・西福寺の出。その御略歴は明確でないが、わたしの知る限りでは、若き日、法隆寺勧学院の佐伯定胤師について深く唯識を学び、時に入洛して足利義山和上（足利浄円先生の祖父）に教えを乞う。また豊後高田の名僧・東陽円成師（本派・西光寺）に師事し、同師を中心に明治四十二年には、仏教済世軍の真田増丸師と共に修道院を創設して青年の教導にあたる。

また昭和になってからは、山口県の中ノ関に居して円通学園を主宰、昭和四年六月に個人雑誌『自照』を創刊（昭和九年に廃刊）して漸く世間の一部に知られるにいたる。

なお、昭和九年のころ、大分県中津に居を移し、あとで述べるようにここにて生涯を終えられる。そして、その教化と感化は、今もなお北九州から山陽にかけて、大地の底に滲みるように、非常に深くして切なるものがある。

○

老師との私のご縁は、旧著『凡人の求道』（絶版）に、「善知識を仰いで」と題して、述べたことがある。その要旨を再録させていただくと、祖山師に、この世で始めてお目にかかれたのは、昭和九年の春、鹿児島県志布志の金剛寺（当時、暉峻康範住職）においてであった。しかし老師のことは既に福島政雄先生から承っており、殊に師の「自照」誌中の日記に、菜園に用いる糞尿が転じて野菜の精と成りゆく自然界の至妙なることを述べられた一文は、深くわたしの心に銘じていた。

さて、金剛寺さんの老師のお部屋に坐った私、そのとき私は二十五才。獲信したつもりの私が、そのころ、一切が打ち砕かれ、心昏く障多く、仏智疑惑の真中にあった。「無信といえば無信の、疑い心ばかりの」「十九願、二十願どころか、ただただ仏智疑惑の地獄」と、絶句するように申しあげれば、老師は「有難いことを」と、わたしを拝まんばかりにして、寂かに念仏申される。わたし、「ちっとも有難くはありません」と、さらに、かたくなになって申しあげると、「だから、有難いではありませんか。そのような私どもであればこそ、仏さまは、今現に、お見捨てもなく」と。わたしは、このとき、天地の六種に震動するような深い深い感動をうけた。

わたしが祖山老師の大経の御講話を拝聴したのは、このときの二日間と、それから昭和十三年の夏であったか、足利浄円、福島政雄、白井成允の三先生発起によって、比叡山の延暦寺宿院において、老師の法座の催されたときであった。そのご講話はまことに切々として、従来の私の理解、私の領解がことごとく顛倒の妄見にすぎないことを、あらためて自照せしめるような、実に深沈たるものであった。しかし、それだけにお西の伝統的な教学からは、殆んど顧みられなかったようである。

ともあれ、私はこのときが最後になって、遠く満州に赴任し、ついに再び老師を拝する縁を逸したのである。というのは、わたしがシベリアから帰国したときは、すでに大分県中津市北堀にて、この世を去られたあとであった。

老師の著者には『自然法爾』（足利浄円師監修）と『大無量寿経五悪段講話』（脇観導師篇修）及び『自照（祖山病床遺稿）』（但しいずれも絶版）があるにすぎない。その中の二・三を抜粋して、左に謹記してみる。但し仮名ずかいなど、多少変更したことをお断りしておく。

○

動物愛護などというまえに、自分らが動物から愛護をこうむって、いのちを保っていることを、まず深く感謝すべきであります。

○

法蔵比丘のご本願のほかに、釈尊の実際はない。されば釈尊は、まったく法蔵比丘の化現された方であります。しかも法蔵比丘は、ただ釈尊お一人の上にのみ化現したまえるにあらずして、一切衆生、すなわち私たちの上にも、念仏となって化現したまうところに、法蔵比丘活現の尊いお姿が拝まれるのであります。

○

わたしは大無量寿経の五悪段が、最も尊く思われるのであります。（略）これは、弥勒菩薩自身の精神内容―自照

内容が示されたものであると同時に、釈尊ご自身のそれであります。さらにいえば、これは釈尊なり、弥勤菩薩が、自らが三毒五悪の所有者であり、凝結者であって、どうてい、よき道を歩みうる善人・智者ではあり得ないとの、ご自照の流露であります。

○

十八願成就の文については、古来、高僧の大士の方々が、名号を聞いて信心歓喜し、それを至心廻向して往生を願った。そこで文字通りに聞き信じようと粉骨砕身されたのである。しかるに親鸞聖人は、聞けとのお言葉は聞き得ない自己への鏡であり、信ぜよの教えは信じ得ない自己への自照の鏡であり、いよいよ聞く耳も、信ずる能力もない、愚禿―（略）大馬鹿者であることに徹底せられたのであります。（略）

このように聖人は、聞けよといわれても聞きえない、信じよといわれても自ら信じえない、この愚禿の身に、如来のかたより至心に廻向したまえる大悲の聞其名号・信心歓喜であることに徹底せられたのである。要するに聞信とか無疑とかの底を徹去して、なにものをも所有しない、全体が阿弥陀如来の体現であります。それを言葉に出していえば、聞かせてくださり、信じさせてくださり、疑いをはらせてくださる、お慈悲といただくのであります。

○○

最後に、昭和二十三年四月末日のご臨終直前の老師の御歌を二つ掲げる。

除かるる身にしあれどもみ仏の救いたまえるめぐみ尊とし

一息（ひといき）の中にきわまりなきめぐみ、仰ぎて生きるわが身尊とし

合掌

追記　故佐々木徹真先生が、かって戦後の「自照」誌に臼杵祖山師の御日誌を紹介され、追慕されたことがある。また岐阜の国広真量氏からは、貴重な資料を貸与いただく、附記して感謝の意を表する。

一道会の記

次ぎに**井上善右衛門先生**のお話は次のようでありました。

今日榊原先生の仰ったように、好き師に遭うということは、企てて出来るのでもございませんし、全くどうしてそのお方に遭い得たことか、まことにそこに尊さ有難さを感じることであります。「幸に有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」ここを御住職、毎年拝読の時声をつまらせられる、そのことが私の胸に響くんでございます。

本年は白井先生がお亡くなりになりまして七年になります。私は池山先生のお話を承りましたことは数回に過ぎませんでしたが、どういうわけですか白井先生には学生の頃からお亡くなりのその時まで、四十何年かの御育てをいただきまして、これは忘れることができません。それで白井先生は御生前は、いつもこの座敷のあの辺にお坐りになっておられました。先生の『青蓮華』という歌集がお亡くなりになってから出来ましたのですが、これを拝読しますと、先生のお住いになっていた世界、それから、先生という御方の一般に申しますと御人格と申しましょうか、そういうことが如実に感じられます。今日この会に参加させていただくので、昨夜いささか青蓮華の中から抜粋してまいりました。皆様とご一緒にしのばせていただきたいと思います。色々のお歌の中に色々の先生の面影が出て参りますんですが。

榊　原　徳　草

あめつちの清きまことのすみとほり
　南無阿弥陀仏の声となりぬる

これは先生が南無阿弥陀仏を仰がれ命とされたそのお心が、さながらに私には感ぜられますのです。そして又

極みなき命の泉ばかりなき
　光りのみいづ　南無阿弥陀仏

これはお正信偈の「帰命無量寿如来」「南無不可思議光」をお歌になされたと拝しますが、美しい御言葉と思います。

弥陀仏のみちかひゆえに天地の
　おのづからなる寂(じゃ)けさに入る

この御歌が、殊に胸に響くんですが、しずけさというも静寂の寂という字が書いてあります。先生の身近な色々な人生のお姿を伺ってみますと一層このお言葉が身に滲みますのですが、人間としては、どうにも始末することが出来ないような、諸問題が「弥陀仏のお誓い故に天地のおのずからなる寂けさに入る」この寂けさという一語が何と申してよろしいでしょうか、大統一の中に納めとられてゆく、まとめこまれてゆく、超えられてゆく、何かそのおこころ、何か先程の純粋に澄み切った世界と、それに続く静寂というおこころが、やはりここににじんでおる感じが致します。

そして

いつの日に死なんもよしや弥陀仏の
　光の中の御命（おんいのち）かな

池山先生の先程のお言葉の中にも、このおこころが光っています。このお歌も全くこれと表裏するとの感じがいたします。次ぎには

たまゆらの世に生れきてとこしへに
　悟りの道を聞くべかりけり

先生が色々の人生の諸問題を背負われながら生きた意味、そこに生れ難い、何ものにも易え難い、生れてきた極りのない尊さ、そういうことをこの一首に感じるのでございます。それから先生の他の一面を申上げてみますと、こんなのがございます。

ひきょうなるわが心かも苦しみの
　受くべきあらばさながら受くべし

白井先生をお知りの方は、優しいお顔が浮かばれましょうが、実は先生の心の底には、こういう厳しい一面を深く宿しておられたことを私つく〴〵思い起こさせるのでございます。しかもまたこんな歌もございます。

黙り居れば涙は消えず湧き出づる
　涙消さんと書を開くなり

これは先生の上に色々と思い出が湧くのでありますが、この歌を通じて先生のお心がしのばれるのでございます。

相共にしづけき宵を楽しまんと
　のらしし言葉今はむなしも

これはドイツ語の木村謹次先生、先生と木村先生とは同級でありまして、ゲーテの研究をされておられたが、若くして逝かれた木村先生を偲ばれてうたわれた一首でございますが、ここにも言い知れぬ感銘を覚えるのです。又こんな歌がございます。

魚はめば魚の骸骨皿にあり
　おそろしき我が命とぞ思ふ

ここにも先生のお人柄が偲ばれると思いますと同時に、

又こういう歌

われをのみ正しとよびて他を責むる
　迷ひの渦に国は亡びぬ

先生は明治のお方と申せばそれに間違いございませんが非常に愛国心を持って居られました。日本の国の未来ということに心から憂いと願いを持っておいでになりました。これは戦後のお歌ですが日本の国の行末を深く憂いておられたのではないかと思われます。

それから少し転じた所のお歌を申してみますと

美しき黒髪よとわれを見て
　ドイツ娘は叫びしものを

先生がドイツ留学の時の或る日、公園で腰掛けて居るとドイツの娘が前へ廻ったり後へ廻ったりして、最後にそばによってきて「オー、シュバルツ、ハール」と云ったと。何と美しい緑の黒髪でしょう、とでも訳しますか、こういう思出を語られる奥に、日本人の黒髪というものを深く愛されたんです。ところがそれに対しても、こういう歌

ちぢれ毛の紅毛の毛になりにけり
　大和乙女の直き黒髪

最近の日本の娘さんを見られて先生は、心ひそかに痛まれたことでございましょう。それからこれは、先生の日本の行く末に対する大きな希望と願いを歌われたものと思いますが、

みめぐみの露のしげきをひとごとに
　覚ゆる世にはいつかなりなん

こういう世の中になって欲しいというおこころかと思います。また

いなほみな垂りに垂りたる田の面(おも)を
　、静けく照らす夕陽影かも

こういう世界を常に願いと懐かしみをもって望んでおられた先生であります。まだ少しございますが、これぐらいにいたしましょうか、然しこんな歌もあります。

覚りの道に人を恋することあらじと
　思はんとせしことの愚かさ

また

よしあしの迷ひをおさめものみなを
　一つと照らす智恵をひらかん

先程の西元先生のお話にございましたように「己れ自らを灯とし、自らを依りとごろとせよ」そういうお心が先生の御歌にもひびいているのではなかろうかと思います。

お歌についてはこんなことに致しまして、一寸一言添えさせていただきたいと思いますが、足利浄円先生、白井成充先生、臼杵祖山先生、こういう先生方の御縁で「自照」という雑誌を続けさせていただいておりましたが、不思議

なものでございまして、廃刊になった今も自照誌を読んで下さった人々の集いが、彼方、此方になお息を続けていて下さるんです。高松にも福山にも広島にも別府にもございまして、ここ数年来、別府で十月に自照講座を開きます。私、中井玄英さんと一緒にまいりましたんですが、その別府の自照会を支えて居られたお方に阿部克己さん、この方は不思議な方でございました。製材所を経営して居られましたが、私は仏法を聞くために製材所をやって居るんです、と云って居られました。非常によくお念仏される方でございました。その阿部さんが此の五月癌で亡くなられました。で今年まいりましたら奥様がノートの片端に走り書きしておられたのを知らせて下さいましたが、こういう一首です。

いつの日かわれに来りてわれとなる
われを引かれてゆかせたまへり

池山先生の

われならぬ清らのわれのわれにありて
穢悪のわれをわれにしらしむ

のお歌がおもわず心に浮かびました。どういう話が交されたか知りませんが、その時阿部さんがこんなことを言われたそうです。「癌は癌細胞が勝手に増え続けておるので、それは善いことでも悪いことでもない。私の心には何の関係もない」こう言われたそうです。その時そのお友達の方は驚嘆したと、私この話を聞き、私も驚きましたことです。そういう心境になるんであろうかと思いますが、然しこれは「罪悪も業報も感ずること能はず」と（歎異抄七章）こういうことをこれは申されるのではなかろうか、そんな感じが致しました。

それから、もう一つ付け加えさせて頂きたいのは、熊本から来ておられた六十四五のお方、座談会の時に非常に明晰な言葉を使われる。どういう方かと思っていました。そしたらその人は裁判官でいらっしゃって、色々所懐を述べられたんですが、こういうことを申されました。「かって、自分は或る時、ある一人に刑の判決をしました。裁判官として色々な判決をせねばならなかったけれども、その一人の判決が自分の心から離れない、そのとき、しんみりとこれが業というものかと思った」と。それから裁判官をやめて現在弁護士をして居られるこの頃色々なことで裁判官が報道されますが、こういう判事も居られるという感じが致しまして、そしてその方がこんなことを言われました。その日お昼のお話の時に私が「問いの無いところに答はない、自分の問題意識を持たずして法を聞くということは、法を物語りにしてしまうことだ」と、私が申したんです。それに対してその方が、夜の座談会でこんなことを聞かせて下さった。「それもそうだけれども、いつも自分が問題を持っていてお話を聞くわけにはいかない。聞法というのは、その時自分に聞いていてわからなくても、それを大切に胸に保存するのだ」という言葉を使われました。胸に保存する、そうすると、この人生には屹度、思いあたることが起ってくる、きっと胸に頂いたお言葉が甦ってくることがある、と。聞法のために大切にせねばならぬ心掛けだと思ってまいりました。ありがたい教えをいただいた気持がいたしました。

一道会が浄住寺さんのお蔭で毎年集まらせて頂くことはかえ難いことでございまして、十月最後の日曜日、この日が毎年寒さを身に覚える。これから段々寒い冬に入ってゆくんだと。好き師に遭いましたその御縁というものを、いよいよ私共は胸にかみしめていただかねばならないと感じるのであります。どうもありがとうございました。

以上で諸先生のご法話を終りました。

私は閉会の言葉として、我々は御仏壇の前に坐ると自分の善い方を出してお念仏する癖がありますが、お念仏は私の悪業煩悩を知らしめして、それをお見抜き下さってのお呼声であって、恰も洗濯器のように私の穢悪汚染を洗い落してくださる。かかる奴に「しかるに仏かねてしろしめして」それも十劫の昔からのお呼声であることを申上げて、閉会の辞としました。そして「皆様一緒にお念仏いたしましょう」と呼びかけ、一同、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と斉唱しました。

これで会を結びまして、それから毎年の様に手作りの精進料理で御斎をいただきました。三四十人の人々と、緊張を解いて話を交しつつ夕暮れ時に三々五々解散となりました。今日は娘の主人が車を持って来ましたので、花田先生など京都駅までお送りすることができました。

長崎の人々は毎年この秋の一道会をもって心の元旦、お正月とされると伺いました。身体の新年と心の新年、肉体の誕生と心の誕生と、人間と生れて二つの新年と誕生を生きる者は誠に悦ばしいことであります。

翌日の午前には、長崎の人々が、かねての御約束の通り訪ねられ、二河白道について御相続の法縁を催うさせていただきました。

私も八十の高齢となった今、来年は期し難いのであります、ほんとうに一期一会であり、無常迅速でありますが、聖人のように九十歳の寿を念じておることであります。

（昭五五、十二、二十八日）

御一代記聞書抄（続・一八）

井上善右エ門

法敬申され候、「たふとむ人よりたふとがる人ぞたふとかりける」と。前々住上人仰せられ候、「面白き事をいふよ、たふとむ体、殊勝ぶりする人はたふとくもなし、ただ有難やとたふとがる人こそたふとけれ、面白き事をいふよ、もとものことを申され候ふ」との仰事に候ふと。（第二五一条）

一

ここに「とふとがる人」とは本願に帰して自然のよろこびに身を任す人であります。即ちその人は、他力真実に生きる人でありますから、自分から為すという意識はないでありましょう。努めて「とふとむ」のではなく「とほとがる」という表現が如何にもふさわしく感じられます。

本願に帰することは、己れを忘れることであります。「至心信楽己れを忘れて速に無行不成の願海に帰す」（報恩講式）とありますが、本願の広大さ、その尊さに思わず己れを忘れるのです。歎異抄に「ただほれぼれと弥陀のご恩の深重なること常におもい出しまいらすべし」とあるのも、同様のこころでありましょう。そうして行住坐臥、本願の中に生かされる人となる。そういえば、いや、そうはなりがたい、あれがああか、これがこうかと心が駈けめぐると云われる人もありましょう。如何にもその通りですが、その散乱の心の下から本願の悲心が偲ばれ、瞋恚は瞋恚、愚痴は愚痴のそのままに本願に帰せしめられることもまた事実です。

「そのまま」ということは、決して現状肯定ではありません。己れを忘れることです。己れに滞っていた心から解放されることです。本願に生き本願に催されると、意識的な「とほとむ」心が消えて、ただ有難いと「とふとがる」身に転ぜしめられます。それは本願真実にまるめられる心でありますから、そこに自ずと、真実者の光が豊かに宿りきたるのです。

二

法敬坊は、真実の念仏者の姿からこうした感銘を受け、その実感を「たふとむ人より、たふとがる人ぞとふとかりける」と申したのでありましょう。蓮如上人が、その言葉の味いと調べの面白さを賞でられて、「面白き事をいふよ！」と申されたのでありますが、その応答の様子がありありと浮ぶように偲ばれます。

たふとむ人を上人は、「殊勝ぶりする人はたふとくもなし」と申されていますが、わざと尊むふりをするのは無論のこと、そうでなくとも、何かそこに自身の力みが潜んで、殊さらな様子が見えるものです。「とふとがる」とは、その臭味が抜けた清々しい姿であります。

法敬の言葉は「とふとむ人」と「とふとがる人」とに向って「とふとがる人」こそ本当に有難いと述べたのでありましょうが、香月院師の講録には、殊勝振りする人に対して、有難い御出家と尊重して「とふとがる人」のことと解し、その何れが尊いかといえば、尊まれる人よりも、それを尊み重んずる「とふとがる人」の方がまことに尊いとの意であると述べられています。文の意はいづれにも解されましょうが、後者の解釈にもまた味うべきものを感じます。我々はどうかすると、ものを見るのに批判的になりがちですが、殊勝振りする人をも尊むことが出来る心境は仰ぐべきものを感ぜしめます。他を見る目が自に転じて、ひたすら自の真実に生きる人こそ尊いではありませんか。

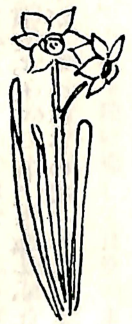
三

さて法敬が「たふとむ人」と言った言葉を承けて、蓮如上人は「たふとむ体」と申されています。その体とはていと読んで、たふとむ様子、体裁ぶる人と解してもよろしいでしょうし、また体とはその人の本質と見て、内心を洞察され殊勝振りする人の心の内を悲しまれたと解することも出来ましょう。要するに蓮如上人が「仏法者後世者と見えるように振舞うな」と心底を誡められた意に外なりません。

仏法は真実の教えであります。人間は自己中心の執に生きるものであります。その執のあるところ、如何に体裁をつくらい振舞うても、覆い隠すことの出来ない不実の醜いものが暴露されます。これは如何ともすることの出来ない厳しいものであります。その反対に真実の光が宿されてくると、その光りが自然に発露して人の心を打つものでありそこに法爾の美しさと尊さとが現われます。第九五条に、

「尼入道のたぐいのたふとやありがたやと申され候ふを聞きて人が信をとる」と申され、第二一〇条には「信心治定の人は誰れによらず、先づ見れはすなはちたふとくなり候是れその人のたふときにあらず、仏智を得らるるが故なれば、弥陀仏智の有難きほどを存ずべき事なり」と述べられているのも全くその意を同じくするものであります。

「たふとむ人よりたふとがる人ぞたふとかりける」という法敬坊の言葉の味いを余程上人は興味深く感じられたのでしょう。重ねて「面白きことをいふよ、尤ものこと申され候」と仰せられた言葉で結ばれております。



庄松ありのままの記

「おらの話より如来の喚声を聞け」

大川郡造田村字宮西、野崎太郎次方に来り、庭にて草履を造りかけると、主人、同行お前を呼んだのは、草履を造って貰うために非ず、お浄土参りの話を聞きたい故呼んだのじゃと云えば。庄松「浄土参りはおらの話より如来さんの喚声を聞け」といった。

「正覚取ってあるじゃないか」

木田郡東植田村の或同行、大病にて医師にさじ投げられ平生の信心どこえやら失せて、これではどうしょう〳〵と、庄松に聞かんと招けば、庄松病人のそばえゆかず、仏前に御礼せんとするので、御同行、お内仏に御礼たのんだのではない、病人に聴せて貰わんため、病人に早くきかせてくれと云えば、

庄松「おらが本願つくったでなし、助けてやるものを持っているでなし、何も聴せるようなものはない。おらや、おまえを生れさせずば正覚とらぬと誓をたてた仏が、今ここに正覚とってあるじゃないか、これでも不足なのか」とこの一言を病人が聞き、ああそうであったかと大によろこばれた。

念仏詩抄

いよいよ地獄一定

木村無相

香師おおせに　香師＝香樹院徳龍師
〝わが身は現に地獄ぞと
見かぎりながら
ナゼに我をはるー〟

見かぎりながら
なおも我をはる
そこが地獄ー
それやまぬゆえ
いよいよ地獄一定ー

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

どんな念仏でも

木村無相

香師おおせに
〝すこしでも
後生大事ということが思い
しられて
念仏申すようになったのは
如来様に手をにぎられたの
じゃぞよー〟

カラ念仏もそう
フロ念仏もそう
アクビ念仏もそう
どんな念仏もみな
手をにぎられての
上のことー

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

それがそのまま

香師おおせに
〝善知識のおおせに
したがうが
すなわち
仏願にしたがうの
なりー〟

〝ただ念仏して弥陀に
たすけられまいらすべし〟
のよき人のおおせは
それがそのまま
如来さまのおおせー

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

それよりほかに

香師おおせに
〝ワシはなあ
京に三百箱　国に三百箱
それほどのモノを読みあか
したが
ただ念仏して助けられると
言うて聞かせるほかは
なんにもないぞよー〟

ただ念仏して
ただ念仏して
それよりほかは
なんにもないと
なんにもないとー

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ワケのわからぬなりに

香師おおせに
〝ただ精出して聴聞せよ
精出して聞き〳〵すると
ワケのわからぬなりに
助けて下さるということに
ワケがわかるからな〟

ワケがわかったが
信心でも安心でもない
ワケのわからぬなりに
ワケのわからぬなりに

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

五劫思惟　五劫思惟

ある人
〝御恩が知れませぬ〟
と申しあげしに
香師おおせに
〝五劫思惟　五劫思惟
ヒトリゴトに言うておれ〟

弥陀をして
五劫思惟たらしめし者は
だれかー
弥陀をして
五劫思惟たらしめし事は
ナニかー

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

近角真観様を憶う

花田正夫

真観様が三月一日にお亡くなりになったことを、御郷里の丸岡静夫様から知らされ呆然といたしました。かねてから御病気とはお聞きしておりましたが、こんなにはやくお別れせねばならぬとは、全く思いもかけぬことでありました。

今までに真観様のお噂さはいろいろとお聞きしておりましたが、本当にお心に触れ得ましたのは、美唄炭抗の所長をしていられた頃、突然爆発事故があり数人の犠牲者が出た時でありました。その前年、御郷里の西源寺で常音先生の御法要がありました時、私は病気でお参り出来ませんでしたが、家内が是非一度お参りしたいと云って出掛けました。その際、真観様や大字様に非常に御親切にしていただき、感激しておりました。その時、「美唄炭抗もひどい赤字だったのが、どうにか黒字になったので、これからは保安のことにつとめ、一人の犠牲者も出さないようにしたいものです」と話して下さったそうであります。

ところが、人間がどんなに注意していても、不可抗な突発事故があるもので、何とも云えぬ悲惨事がおこりました。早速御見舞状を出しましたが、お返事に、

「なにごとも、こころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといわんにすなわちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり……。また害せじとおもうとも百人千人をころすこともあるべし云々」

とある、歎異抄十三章の聖人お言葉をお読みし、私の苦衷をここまでお察し下さる御慈懐に触れ、自然に心も落着き、世間の風波はそのままうけて、私に出来る限り遺族の慰問をさせてもらいます、とのことでありました。

炭抗の人々から〝所長〟と云わずに〝おやじさん〟と慕われる程に情の深い真観様としては、人一倍に、御苦悩が多かったこととお察しいたしました。ことに所長としての立場にあると、世上の風評も讃否まちまちに吹きすさびましたことでしょうが、その一切を身一つにうけて、為すべきことを十分に果されたのでありました。

私はこのお手紙をお読みして、二河白道の一地点・水火の波浪逆巻く中にあって、西岸上の人、弥陀仏の招喚のみ声に導かれて、念仏無碍の白道を歩む旅人をまざまざと拝する思いがいたしました。

こうしたことがありましてからは、よそ人とは思えなくなって、地下水が絶えず交流するような親しさをおぼえて今日におよびました。福島政雄先生のお歌に

おなじ世に、同じ仏のむねに生くる
　久遠の友を　恋ひてさすらう

とありますが、久遠の友となって下さったのでありました。このことは、離れるとうとんじ、遠ざかると忘れる人の世の鉄則をこえた、たのもしくもありがたいことでありました。

常音先生の奥様、伊恵子夫人も「真観ちゃん」といつも親愛の情こもる愛称をもってお話していられました。

常音先生から承りましたことは、常観先生の御長男の文常様が東大の文学部に入られ、求道会館のあとを継がれることになり、御次男の真観様は「将来の日本に、労働問題がやかましくなるから、信の上からその方面で働いて欲しい」との常観先生の御願いから、経済学部に入りそれを卒業されると直ちに九州の炭坑を振り出しに、その方面で働かれたのでありました。不幸にも今度の大戦で文常様が中国の芦山で戦死されましたが、直観様はかねての仕事を続けられたのでありました。

直情径行で、天真爛漫なお性格は、接する人々に、信頼され、親愛されたことであります。東京に居を定められてからは、常観先生の御晩年に発行された、信界建現誌の中の、歎異抄愚註を整理して出版したいと仰っていられましたが、その中途で御病気、遂にお別れとなりました、御心のこりのことと遙察申しております。慈光誌についてもとくに御心配下さいまして、常観先生の御著書の中、信界建現のもの以外は、何からでも転載してよろしいとまで言って下さいました。

今はただ語らんとして言葉なし
　六字のうちに　問いつ応えつ

であります。

あとがき

仏誕生の四月八日、花御堂に誕生仏をまつり、讃仏の歌声が随所にひびきわたったことでしょう。また青年学徒は入学に卒業に、夫々希望に胸をふくらして新出発、お芽出度い限りであります。

人々の信の遍程は聖典であると云われますが、今回は、信の上に立たれて教育学を極められた福島先生の入信の径路をいただきました。私共の信の旅路の上によき枝折りとさせていただきましょう。

又、福島先生が、信の上で厳父として近角先生を仰がれ、慈母として臼杵先生を慕われましたが、西元様が、老師の信徳を讃仰して下さいました。世に稀れな念仏の僧の範と申すべき方であったと、種々の人から伝えきいて居ります。

榊原様の一道会の最終の記に、井上様が生涯のよき人として師事された白井成允先生を追慕されたお話を筆録下さいました。白井先生と福島先生は、御性格は対蹠的でありましたが、白色白光、赤色赤光と経典にありますように、夫々に信心の華から光りを放たれました。

井上様の蓮如上人御一代記聞書で「たふとがる人」について述べて下さいましたが、上人はまた「聖教よみの仏法を申したてたることはなく候。尼入道のたぐいの、尊や有難やと申され候をききては、人が信をとる」とも言われています。四国の庄松同行は「おらがよろこぶと、人がひろうてよろこぶ」と無我な心境を語っているのも思いあわせました。

木村さんは大変な寒い季節も無事にすごされ、春光をよろこんでいられます。然し何よりも法の友の訪れと、法信とを一番によろこんでおられる由であります。

最後になりましたが、近角真観様が三月一日に浄土にかえられました。ここ数年来お病気勝ちで居られましたが、平素のお元気な御様子からこんなに早くお別れせねばならぬとは思いませんでした。御一統のお悲しみはもとより、近角先生に御縁の深いお方々からは驚き旦つ惜しまれる声がしきりでありますが、今は唯「倶会一処」のみ仏のお誓いに、限りない感謝を頂くばかりであります。南無阿弥陀仏。

〈御案内〉

○毎月第一、第三日曜、午後一時半
一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。
市バス、御器所通り又は北山下車。
地下鉄、御器所通り下車

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。
(但し日曜を除く)尾西市三条板倉
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

慈光　第三十三巻　第四号　昭和五十六年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　坂部光雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七
名古屋市南区駈上町二ノ八八